優秀賞論文要旨

『或る女』論—目覚めかけた女と作者の意図—

古　田　敦　子

現代は男女平等が公然と謳われ、当然のことであると受け止められるようになった。その実現は未だ完全とは言えないが、男女平等という意識が芽生え始めた頃と比較すると違いは歴然としている。明治・大正時代は、教育や法律においてはっきりと男女差別が存在する一方で、「新しい女」と呼ばれる女性が登場し、社会の変化を求める声があがり始めた時代でもあった。そのような時代に書かれた『或る女』の主人公・葉子が「新しい女」であったのかどうかを明らかにし、作品の主題を読み取ると同時に、それが有島の意図したものであったことを確認することが本稿の目的である。

まず、「新しい女」の定義については、平塚らいてう・福田英子・与謝野晶子といった実在の「新しい女」を取り上げ、彼女たちの共通点と葉子とを比較し、〈目覚めた自我によって、女性の地位向上のために外部に働きかける女〉という定義を導き出した。この定義と「新しい女」たちが女も人間として扱われることを求めたということを確認すると、定義にも合わず、芸者をうらやましく思っているなど、葉子は「新しい女」ではないことが明らかとなる。しかし、目覚めかけた自我があり、恋愛をするなど「平凡」な女とは言えない面もある。したがって、葉子は「新しい女」でも「平凡」な女でもなく、まさに有島が意図した「自覚に目覚めかけた女」だったということが言える。

有島は書簡の中で、『或る女』では「女は男の奴隷」であるという社会の現実と、その社会に生きる「自覚に目覚めかけた」女性の悲劇を描いた、と言っ

ている。その一方で、女性には男性を憎むと同時に男性に拠らなければならない本能というものが生じた、と有島は考えていたため、葉子は「新しい女」にはなり得なかった。『或る女』では男尊女卑という社会の現実の中で、「自覚に目覚めかけた女」である葉子が、女性の本能によって破滅していく姿が描かれており、有島の意図と一致している。

『或る女』は多くの女性読者に読まれたが、そのために当時の文壇では通俗小説として評価されなかった作品である。研究史を見ても、葉子が「新しい女」ではないということのみで否定的な意見を出している人もいる。しかし、明治・大正という時代的な制約を受けながらも「自覚に目覚めかけた女」を主人公にし、男尊女卑という社会の現実を描いて見せたことは画期的なことであり、そこに作品の意義があると言える。